

特集：島根県～神話と歴史と景観と．．．～

712年、今から1300年前に編纂された日本最古の歴史書『古事記』。その記述の3分の1が日本の国土誕生から始まる神話の世界を描いている。そしてその神話の多くが島根県にまつわるものだという。

島根県では、古事記編纂1300年を記念する「神話博しまね」を2012年7月21日から114日間にわたって開催する。主会場となる出雲大社周辺と安来市、松江市の観光地を訪ねその魅力を探ってみた。

I. 出雲市

『神々が集うところ』

出雲大社は^{おおくにぬしのみこと}大国主命を主祭神とする神社で、神の国と言われる出雲地方の象徴である。『古事記』などに書かれた神話によると、日本の国づくりを行った神である大国主命が天上界の神々に国を譲った。その代償として大国主命のために創建されたのが出雲大社であるとされている。この国譲り神話では、^{あまてらすおおみかみ}天照大神が交渉の使者として自分の子供のひとりをおおくにぬしのもとに派遣したのであるが、その子孫が代々出雲大社の宮司を務めており、現在84代目である。

「出雲縁結び空港」から出雲大社へ向かう道沿いには延々と水田が続き、いかにも米作りを中心に成立した日本文化を象徴する風景だ。日本の原風景とっていい景色を眺めると、大都市の生活に疲れた心がホッとしているのを感じる。



勢溜の鳥居

^{せいだまり}勢溜*と言われる出雲大社の参道入り口には木製の鳥居がそびえる。鳥居をくぐると、他にあまり例を見ないという下り参道が続く。松並木の間の石畳を下って行くと、右手に小さな社がある。人が知らぬ間に犯している^{はらいのやしろ}けがれを祓い清めるといわれる祓社だ。ここで心身のけがれを清め、参道を更に進む。



祓社

*かつて芝居小屋や見世物小屋があり人が集まって非常に賑やかだった場所。人の勢いが集まる場所という意味でこの名がついた。



白兎を優しく見つめる大国主命

珍しい鉄製の鳥居とそれに続く松の並木の先に
いよいよ社殿が見えてくる。松並木を過ぎると、
参拝前に手と口を清める手水舎ちょうずやがあり、その左側
に大国主命の慈悲深さを表す「因幡の白ウサギ」
の神話*をテーマとする
銅像、右側に大国主命
が縁結びの力を得たと
言われる「幸魂奇魂」
*を象徴するムスビの御



ムスビの御神像

神像がある。

縁結びの願いが叶うということで女性に人気があるパワースポットだという。

*意地の悪い兄弟神にいじめられた白兎を慈悲深い大国主命が助け、そのお蔭で美しい女神と結婚できたという神話。

*大国主命が持っていたとされる「分裂し繁栄する力とそれを調和させ統一する力」。御神象はその力が海のかなたから光の玉となって飛んできて、大国主命にその力がある自覚をもたらした神話がテーマ。

境内入口にある銅製の鳥居をくぐると、大注連縄がひと
きわ目を引く御仮殿おかりでん*がある。御仮殿背後の本殿は1744年
建立の国宝で、現在平成20年4月から5年の歳月をかけた「平成の大遷宮」による修造工事中である。大社造りの本殿が工事用の被いの中から再び姿を現すのは今年の上旬の予定だ。

*本殿修造中御神体が遷されている社殿（通常時の拝殿）



三本の柱が発掘された場所

工事中的本殿の付近に興味をひかれるものが2つある。

1つは2000年に発見されたかつての本殿を支えたと思われる巨大な3本の柱の発掘跡で、平安時代の本殿は現在の倍の高さ(48メートル)であったという説を証明するものと言われている。

また2つ目は本殿の東西に配置された細長い建物「十九社」じゅうくしゃだ。旧暦の10月に全国の神様が出雲大社に集まって、男女の縁結びも含む人生諸般のことを神議かむいはかり（神様の会議）にか



けて決めるとされている。その時全国から集まった神々の宿舎となるのが十九社だという。

年に1回全国の神が自分の土地を離れ、出雲大社に集結する。だから旧暦の10月を全国的には神無月と呼ぶが、島根県だけは神在月と呼んでいる。島根県は神々が集まる唯一の土地なのだ。

やおよろず
十九社は八百万神の宿舎

『謎解きのロマン』

出雲大社に隣接する「島根県立古代出雲歴史博物館」には、ロマンを掻き立てる展示が2つある。

1つは出雲大社の本殿前から発掘された巨大な木の柱根で、鎌倉時代初期に造営された本殿の柱と推定されている。2000年に発見されたこの柱根は、それまで当時の技術では不可能とされていた



本殿前から発掘された巨大な根柱

高さ48mの
巨大神殿の

存在に現実味を与えるものだった。48mの神殿が実在であれば東大寺の大仏殿よりも高く、当時の日本における最も高い建造物といえる。



巨大本殿の各種想像模型

同館内にはかつての巨大本殿の姿を再現する想像模型も展示されている。かつての神殿の形については諸説あるが、館内の模型もそれを反映して数種類例示されている。平安・鎌倉時代のものは現在の本殿の2倍であったが、太古の本殿は96mあったとも言われている。

ている。



発掘された大量の銅剣

また2つ目の古代ロマンは、1980年代から90年代にかけて発見された358本もの銅剣、16本の銅矛、合計45個の銅鐸で、全て国宝に指定されている。他に類を見ない大量の太古の銅製品の発掘は、この地に壮大な権力を持った者が存在した証しであり、日本国の成立にこの地域が深く関わっていた可能性を思わ



古代のロマンを語りかける銅鐸

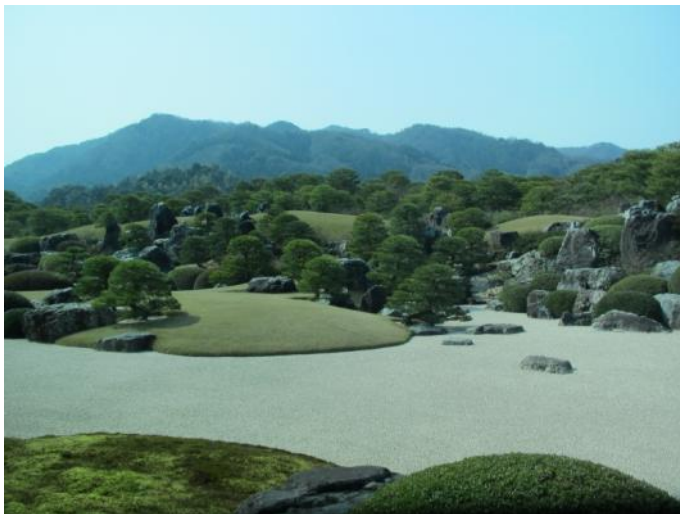
せるものといえる。

Ⅱ. 安来市

『名園と名画に心を洗われる時間』

次に、神話の世界からは離れて、安来市やすぎの足立美術館を訪ねた。創設者の足立全康氏が集めた近代・現代の日本画等のコレクション 1,500 点を四季折々の移ろいに合わせて展示替えをして公開している美術館だ。横山大観の作品を中心とする美術品も見事だが「庭園もまた一幅の絵画である」と、創設者自らが精魂を込めて作り上げた日本庭園は、アメリカの日本庭園専門誌で 2003 年から 9 年連続で日本一の庭園と認定されている。ミシュラン・グリーンガイドでも「三つ星」の評価を受けるその名園を紹介する。

明るく近代的な正面玄関を入り順路に沿って進むと、すぐに京都を思わせる庭園が見えて来る。廊下の右手に苔庭、左手には茶室を包むようにしっとりせいひつと静謐な茶庭。この時点でもう別の世界に一步足を踏み込んだ気がした。しばらく苔と赤松のやさしい緑に目を休める。



借景の山々まで一体となった広大な枯山水庭

爽やかな気持ちになって先に進むと、視界を遮るもののない天井までの大きなガラスに囲まれたロビーがある。外は広大な枯山水の庭園が広がっている。これほど大きな枯山水庭は見たことがない。その存在感に圧倒されて暫したたずむ。そしてガラス窓に近づいてみたり、離れてみたり、そうかと思うと長椅子に腰かけてみたり、何故か落ち着かなくなる。いろいろと見る位置を変えてみたくなるのだ。「広大な」という

感覚は、単に庭が広いというだけではなく、勝山かつやまを中心とした借景の山々が庭園の景観に見事に溶け込んでいるからだろう。館主は借景の山に電柱一本立てない約束をとりつけている、というこだわりようである。

右手の方を見ると、岩肌の黄土色が印象的な亀鶴山きかくが見越し松の後ろに迫っている。そ

の岩山から流れ落ちる滝は、庭園と調和するように人工的に作られたものだそうだ。創設者が愛した日本画の世界を庭園造りにおいて再現している。理念を現実のものにしていく。そこには見事な緻密さと豪快さを感じないではない。



日本画の世界を再現した庭園



掛軸のように切り取られた庭

更に奥に進んでいくと、自然に足が止まってしまう場所がある。まさに「一幅の絵」のように切り取られた景観。窓枠や床の間の形に切り取って見る庭園は、それが枯山水であろうが、白砂青松の庭園であろうが、それらを全体として見たときと全く違った趣が感じられる。

手前の木のシルエットによるアクセントと遠近感、より強調される光と影など、自然と溶け合った庭園美とは一味違う絵画のような美しさがある。

足立美術館最奥部には2つの異なった庭が配されている。順路左側には、豊富な湧水に赤や金色の錦鯉が気持ちよさそうに泳ぐ池庭が、枯山水や苔庭とはまた違う、うるおいのあるやすらぎを見る者の心に与えてくれる。草木の緑とともに、水が人の心にもたらす効果を実感する。



池庭は人の心にうるおいを与える

最後に順路を右手に回り込むと、白砂に石と松を配した庭に出る。白い砂が松を引き立て、石の絶妙な配置が陰影を与える。横山大観の名作《白沙青松》の世界を表現したものだという。池の庭も白砂青松の庭も見学者が見る場所が屋外である点が他の庭



白砂青松庭

と違うところだ。最後に屋外の開放感も楽しみ、いっそう自然の恵みを感じたところで、いざ2階の展示室に入って日本画の世界を楽しむ。本当に心憎い演出だ。

Ⅲ. 松江市

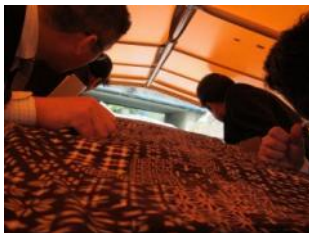
『城下町松江』

松江市のシンボルといえば、もちろん松江城である。堀尾吉晴が17世紀初頭に築城した城で、現在国の重要文化財となっている。城の周囲には武家屋敷が残り、城下町の風情がある。訪れた人は城の堀を巡る遊覧船から城下町の風景を楽しむこともできる。



松江城の周囲を遊覧する「堀川めぐり」

松江城の大手門跡近くの発着場から、堀川めぐり遊覧船に乗った。左に城の城壁を見ながら進むと右手に松江歴史館が見えてくる。堀の周りの遊歩道をレンタサイクルに乗った若い女性観光客が、気持ち良さそうに黒髪をなびかせて走りすぎて行く。宇賀橋を右に見ながら城壁伝いに左に行くと、右手に歴史を感じる屋敷群が見えて来る。今も江戸時代そのままの風情を残す塩見縄手地区だ。茶色の板塀から見越し松の緑が覗き、大きな門には白い提灯がかかっている。松江城の歴史を語る船頭さんの名調子を聞き、左に城壁、右に武家屋敷を見ながら遊覧船に揺られていると、何ともゆったりとした気分になる。いつの間にか、水面に遊ぶ水鳥たちと気分はすっかり同化している。



みんな小さくな～れ

この遊覧船で楽しいのは船頭さんの語りだが、なかなかの人気職種でその倍率は高く、島根県内に限らず全国から応募してくるという。「高い倍率を勝ち抜く秘訣はなんですか」と船頭さんに聞いてみた。「顔」(笑)と「歌が歌えること」が条件だそうだ。「では一曲歌わせていただき

ます」と松江舟唄を船頭さんが歌い始めると、ちょうど長い橋の下にタイミングを計ったように通りかかった。味のある歌声が橋に反響して、素晴らしい音響効果を発揮する。乗客は拍手喝采である。橋といえば、ここならではの趣向がある。いくつかの橋は水面からの高さがとても低く、そこを通るときは船頭さんが遊覧船の屋根を下げなければならない。電動



船の上から眺める松江城は格別

で下がる屋根に合わせて、乗客全員が頭を下げ小さくなる。その時奇妙な一体感が湧くのが不思議だ。

1時間弱で松江の城下を通常は見られない角度から見る事ができる船の旅は、ぜひ体験していただきたい。

遊覧船でゆったりとした気分になった後、お堀沿いの松江歴史館に立ち寄り、地元の人が「イチオシ！」という喫茶「きはる」で和菓子和抹茶を頂いた。「きはる」には和菓子バーがあり、現代の名工に認定された伊丹二夫氏自らが、創作和菓子の実演販売をしている。



現代の名工伊丹二夫氏

カウンターに並んだ繊細で色彩豊かな創作和菓子はすべて美味しそうで、どれにしようかと決めかねていると、伊丹氏が自信満々に、とにかくこのわらび餅を食べてみて、と勧められた。

昼の喫茶コーナーで腰をおろし日本庭園を眺めているとお姉さんが、笑顔と共に抹茶と緑あざやかなわらび餅を運んで来てくれた。きなこが絡みあった粘りのあるわらび

餅を一口口の中に入れてみると、噛まずとも瞬時に溶けてしまった。何と上品な逸品だろう。この瞬間、名工伊丹氏のあの自信あり気な態度が納得できた。ふと窓の外に目を移すと松江城の天守閣がこちらを見下ろしている。



伊丹さんのわらび餅は絶品

松江には本物という上質な時間が流れていた。